

米欧回覧

第26号
編集・発行
米欧回覧の会
事務局

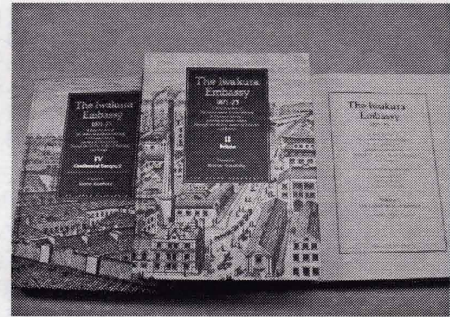
平成十四年の新年懇親パーティー イタリア文化会館と共催で大盛会!

新年恒例の懇親パーティーは、一月二十五日(金)夕刻より、イタリア文化会館との共催で「イタリアにおける岩倉使節団」と銘打って行なわれ、講演あり、スライド上映あり、アリアありの、二百名を越す大盛会となり、新年を寿ぐにふさわしい、いかにも

イタリアらしい大変楽しい素敵な夕べとなった。(詳細は十ページ)

英文版「米欧回覧実記」全五巻、堂々出版される

かねて進められていた「米欧回覧実記」の完全英訳本が、ようやく日本文献出版から出版されました。なお、同社の斎藤純生社長の特別な配慮により当会メンバーには特別価格(二十%割引)で頒布されることになりました。(詳細は十一ページ)



設立七年目を迎えて、「新たな夢」を語り合おう!

―四月の全体例会にふるってご参加を―

泉三郎

昨秋の国際シンポジウムの開催は、当会にとって一つの大きな節目となりました。現在、その報告書やビデオの編集が進んでいます。その完成によってあらためてその意義が再認識されると思えます。そして、この春、出版された「実記」の完訳英訳版ともあいまって「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」の存在が、国内はむろん海外でもさらに広く知

られることになるでしょう。当会も設立七年目に入るわけですが、これを機にわれわれも「新たな展開」に向けて大いに語り合いたいと思えます。「事業は人なり」といいますが、当会の財産はなによりもその「人」にあります。これだけ多彩・有能な人材が集まっている会は珍しいとよくいわれますが、それだけにその力を結集して混迷日

本のために何か役にたつことをしていきたいと思えます。日本人全体が自信や元気を失っているときだけに、本会の存在意義は大きいといわねばなりません。四月の例会ではこのことについても会員相互で大いに議論し、新たなヴィジョンについて語り、建設的な意見の交換をしたいと思えます。

国際シンポジウムを総括特集する...

国際シンポジウムについては、前号でもフォト・ドキュメントを中心に速報記事を掲載したが、本号ではその総括として、活字中心の記事を十二頁の

特集号として掲載することにした。

シンポジウムそのものの詳しい内容については後日出版予定の報告書待つしかないが、ここでは各部門の担当者から現場の生の声・感想をリポートしてもらった。



岩倉使節団派遣百三十年記念
国際シンポジウム
米欧回覧の会設立満五周年記念

全体総括

充実した快いシンポジウムだった

水沢周

S手作りの「学会」の魅力

さまざまな準備を終えて、いよいよ国際シンポジウム当日。天われに味方して天気も上々!とわざわざ言うわけは、会場の設定として、クロージャの必要があるかどうか論じながら、ついにその人数や場所をさげなかつたからで、もし雨天・荒天であれば、参加者の傘の始末などに困り抜くはずであった。

とに役だったのである。会場で集められたアンケートのお答えにもそのあたりのことがはっきりと出ている。「会場運営、進行、展示、いずれもマイペースで落ち着いて行われていたことに好感をもった。ポラントライの味を十二分に見た思い」「いわゆる学会シンポジウムとは性格が違うことがよかつた」「これは、学会などによく出ておられる、いわば「玄人」のご意見なのだろう。「さつくばらんで気取らず、とてもいい」「温かみのある行き届いた運営に感謝」といったご意見もある。総じて運営そのものについて



『S』や時間配分に難が
内容に関して言えば、とくに外国、つまり岩倉使節団を受け入れてくれた国々の方の

は、当日ナマで伺った声にも、プラス評価が多かったように思う。

とりわけ手作り感覚を發揮してインテイメイトな雰囲気を出してくれたこととして挙げたいのは、飲食手配などの兵站部の努力と、展示サロンの運営の努力である。またたくの「縁の下の力持ち」であるが、このふたつの努力がもたらしてくれた上品な親切さの効果は絶大であった。

また、音響・映像についてサポートして下さったグループの力も絶大である。展示物の制作、そして当日のサロンへの中継、まことに行き届いたことであった。

意見が聞けたのがよかったというご意見が多かったが、それとともに、報告者をもう少ししぼって、ひとつひとつの報告の時間をもっと取った方がいいというご意見も多かった。これは実は司会者団としても痛感したことで、序論がやつと済んだところで時間切れといった例も見られ、また時間に縛られたため、多少総花的に終わってしまった例もないではない。初めてのことから、出来るだけ多くの報告者を、ということであったけれども、反省材料のひとつである。次回はもう少しじっくり行きたい。

S 討論はよくかみ合っていた

いちばん困るのは、さまざまな論議が散らばってしまい、かみ合う事なく、言い放しになってしまうことである。その点、このシンポジウムは、問題が比較的絞り込みやすかったらしく、一見ばらばらなテーマが、いつのまにか一点に収斂していくような感じがあった。司会もしやすいところがあった。たまたま英語訳、ドイツ語部分訳の完成があったというタイミングにも恵まれた。

翻訳にからむ苦心談のように、具体的な話がいくつもあったことが、討議にもメリハリをつけてくれたと思う。それにしても『実記』や『木戸日記』のような歴大な史料と地道に取り組んで下さっている外国人研究者には心からの敬意を表したい。このシンポジウムの成功は、これら外国人研究者の力による部分が非常に多いと思う。と言って別に日本人研究者が怠けているわけでは、決してないけれども。

S 涼やかな鈴の音

こういふ討議において最も懸念されるのは報告の時間超過である。これは実際に避けがたいし、折角大車輪でしゃべっている報告者を遮る司会者はつらい。場合によっては討議そのものの質を低めることにもなりかねないのである。

今回はそのあたりを考えたあげく、カードを出したり、口を挟んだりする方法でなく、小さな鈴を振ることにした。本居宣長の「鈴の屋」の故事もあることだ。小さな鈴の音ならば、報告者をいらだたせたりすることもあるまい。そんな思惑だったが、たいへんうまく行ったらしい・・・らしい

というのは、鈴を振る方の立場の勝手な言い分だが、少なくとも無闇な時間オーバーは防げない。鈴の音によって、話のペースが大きく乱れることも、(あまり)なかったように思う。

もうひとつ言いたいことは参加者一オードイエンスの質の良さということである。よく話を聞き、よく反応し、よく吸収して下さったと思う。報告者の皆さんもきつと、とても話しよかったことだろう。

ともあれ司会者団としては、ほんとに心から皆さんにお礼が言いたい。報告者の皆さんにも、参加者の皆さんにも、そして会員の皆さんにももちろんのこと。

会計報告

会員の情熱と努力に感謝

山田哲司

国際シンポジウムに関する収支がまとまりましたのでご報告します。
収入では三団体から計七百万円の助成金をいただく事ができました。このようなシンポジウムでは異例のことと思われまます。企画の内容と質、それを積極的に展開したメンバーの皆さんの情熱によるものと敬意を表します。また、個人賛

助金、参加費も予想以上に集まりました。会員の皆さんのこのシンポジウムにかけた思いが伝わってきます。これだけの数の参加者があったことは今後の会の活動にもつながるすばらしい成果と評価されましよう。
なお、参加者はレセプション百三十八名、セミナー第一日百十名、セミナー第二日七

会計報告書(2001年10月1日~2002年2月28日)

科目	金額	備考
(収入の部) (単位:円)		
助成金		
国際交流基金	2,000,000	
東芝国際交流財団	3,000,000	
トヨタ財団	2,000,000	
小計	7,000,000	
個人賛助金	1,753,000	会員(103名)、非会員(17名)
参加費	3,217,000	参加者合計1051名
合計	11,970,000	
(支出の部)		
会場費	1,518,958	会場、機器借料
招聘費	2,247,499	招聘者航空運賃、謝金
印刷費	563,504	プログラム他印刷費
飲食費	1,942,342	シンポジウム弁当代他
記録費	759,150	ビデオ収録費他
会議費	606,161	実行委員会、幹事会他会議費
展示、映像費	1,063,459	展示パネル制作費他
事務局費	2,269,857	通信交通費、人件費他
その他	999,070	出版物、ビデオ制作他
合計	11,970,000	

十一名、上映会二百六十二名、懇親会六十二名、フォーラム三百八名、計千五十一名でした。

支出の部では、全体として大変効率的かつ節約した仕上がりになったと思います。費用科目別にみますと、会場費は学術総合センターが使用出来たため大幅な節減となりました。招聘費は会議が日本語をベースにしたことにより通訳費が節約できたこと、海外からの発表者のご協力もあって旅費を絞り込めたことが大きかったと思います。事務局費をはじめ全ての科目で、会員の皆さんのボランティア活動により人件費を大幅に節約できたことも大いに助かりました。また、会員一人一人がご

自分の仕事に関連して、便宜情報、資料などの提供を下さったことも経費削減のたゆめ力となりました。

その他の科目九十九万九千円は、現在、収支差額として残っていますが、現在進行中の出版物の編集、ビデオ制作費に充当されることとしております。

会員すべてが、何らかの形で参加、協力していただいた、一体感あふれるシンポジウム運営がこのような収支をもたらしたものと、みなさんと共に喜びたいと思います。最後になりましたが、会計数字の整理にあたりイゼミオフィスの方々に大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

11月22日(木)

祝賀レセプション

訪問十二ヶ国の代表と交流

藤原宣夫

三日間に亘るシンポジウムの前夜祭として祝賀並びに歓迎レセプションを日本プレスセンターで催しました。

開会に次いで、始めに京都造形芸術大学学長、芳賀徹先生が主催者側を代表して祝辞を述べられ、日本近代史に重要な意味を持つ岩倉使節団の一年十ヶ月に亘る米欧視察が近代日本の形成を考える上で、又アジアの歴史にとっても大きな意味を持っていた事を指摘され、使節団が実行した改革の勇氣、冷静な観察力、自己反省等の教訓は現代日本の改革の指針にもなると指摘された上で、今後の研究により更に多くの問題が解明されることを期待すると述べられました。

使節団は、グラント米大統領を皮切りに、十二ヶ国の元首等の歓迎及び謁見を通して日本の政治、経済、産業、教育、文明・文化とその社会の実像をじっくりと詳しく視察すると同時に不平等条約改訂の地ならしを行いました。今回私どものレセプションでは十二のテーブル上にそれぞれの国旗

を立て映像で当時の各国の元首達を紹介すると共に、現在の代表として十二ヶ国の在京大使をはじめ大使館員並びにシンポジウム出席のため訪日された各国からの学者、研究者にスポットライトを当てて、盛大な拍手のうちに紹介を致しました。

使節団最後の訪問国スイスのマンツ現大使は十二ヶ国を代表して乾杯の音頭をとり、使節団がサレソロー・スイス大統領の招待で世界最初のリギ登山鉄道開通祝賀式典に出席し、山上からアルプスの連山と多くの湖を眺望し感嘆したことや今日までの両国友好の歴史に言及され、又、米欧回覧実記のドイツ語版が近く出版されることにも触れてこの会の益々の発展を祈願すると述べられました。

会員からは、我々の勉強会の実績が認められ励みになったとの感想が多く寄せられました。

当日は使節団のご子孫も大勢ご招待し、岩倉具視大使の直系五代目に当たる京都大学名誉教授岩倉具忠氏が代表して十二ヶ国代表へ遅ればせな



がらのお礼を述べられ、今宵はレセプションに招待されましたとユーモラスにお話をされました。氏は幼少の頃イタズラをする右大臣様のお御霊の部屋に連れていかれ、写真の前でお説教をされた嫌な記憶が焼きついていたので事です。

その後、シンポジウムがすでに始まったかの様な内容の濃いスピーチもあり又出席者一同は十二のテーブルを回覧する等して交流をはかり楽しい国際親善の晩餐会となりました。

最後に主催者を代表して泉三郎氏よりシンポジウムの案内と内外の出席者への御礼の言葉を述べて無事、二時間を超える宴を終える事が出来ました。

11月23日(金)

セミナー
第1日

巧みな外国人の日本語と 笑いを誘うユーモア

水沢周

『まずヒットで出塁』

第一日は、岩倉使節団の訪問各国に割り振った報告発表：つまり地域研究、という一貫性がありそうだが、あまり自信がなかった。というのは、研究者の皆さんのテーマをともかくそういう形に寄せ集めてみたというのが真相。また、今回は外国人の方々に日本語によるご報告をお願いしてある。さあ、その日本語の「程度」(まことに失礼な言い方で申し訳ないが)がさっぱり予測できていなかった。そういうわけで、かなりの不安を持ちながらスタートしたのだが、その杞憂はすぐに消えた。

アイヴァン・ホールさんは森有礼の研究者である。当時駐米公使(少弁務使)であった森の評価は分かれるところである。ミスリードもあつたようだし、岩倉・木戸との衝突もあつた。しかし、ホールさんの森への評価はなかなか高い。スポークスマン、文化アタッシュとしての能力を評価、その仕事をライシャワーのそれに譬えた。面白い論議である。トップ・バッター、軽くヒットで出塁というところ。

外国からの研究者のご報告

が、内容といい、面白いといい、セミナーの出来を非常に高いものにしてくれたことを特筆しておきたい。たとえばサー・コータツツイのお話。多分「オックスブリッジ訛りの日本語」と呼ぶべきだろうと思うのだが、ときどきちよつと舌をもつれさせて聴衆を引き付けるといふような細かい芸をお使いになりつつ、独特の雄弁であつた。しかも驚いたのは、用意しておられた原稿を、フルに使つては絶対に時間が足りないといつとつきに判断(これは司会者の判断とも完全に一致する。原稿は多分一時間半ほどの分量があつたと思う)されると、章立てをその場で全く逆転させて、最も大事な結論的部分から始められた。これにはほとんど感心させられたのである。

デ・マイヨさんの、イタリア訛りというか、カンツォーネのごとく、また、小鳥の囀りのごとく美しい日本語にも感じ入つた。パンツァーさんの翻訳苦心談も面白かつたし、ブリーンさんの一点集中的料理も楽しめた。

とにかく日本語で話して下さつたのは有難かつた。同時通訳では内容伝達はせいぜい四

十%くらいになるのではない。しかし、ほんといへんだったとお察し申し上げる、外国のお客さまたちは。

『ユーモアの効果といふこと』

外国人ばかりほめることはない。たいへんありがたかつたのは、岩倉具忠さんの存在である。実はレセプションにおいて岩倉さんのお話を伺つたとき、このシンポジウムの成功を半ば信じたのである。まことに飄々としたユーモアと、高雅な容姿は、まさに独特の存在感であつて、お陰で会全体の雰囲気があつかり温かく、なごみのあるものとなつた。楚々たる翔子夫人との連携ブレイクとあいまつて、よき日本、よき文化の具現をここに得たという思いがした。お話も、「新発見」の岩倉具視手帳のわずかな記述から、具視が持っていた日本の近代化の「かたち」をおしはかつて行くという、鮮やかな手法による、内容の濃いものであつた。それが、独特のユーモアにくるまれるのだから、司会者冥利に尽きる。

洗練されたユーモアというのは、実は天成のものであると思う。岩倉具視その人にユーモアがあつたのかどうか、知るよしもないのだが、岩倉具視の手紙の書き方や、刺客に襲われたときの逃げ方などを見ると、やはり天成の、人柄としてのユーモアを備えていた人だつたの

セミナー第1日発表者



岩倉翔子
就実女子大学教授
「米欧回覧の会」会員



坂内知子
国際基督教大学講師
「米欧回覧の会」会員



ペーター・パンツァー
ボン大学教授



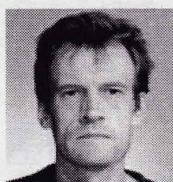
川勝平太
国際日本文化研究センター教授



アイヴァン・ホール
テンブルトン大学ジャパン客員教授



芳賀徹
京都造形芸術大学学長
東京大学名誉教授



ジョン・ブリーン
ロンドン大学助教授



岩倉具忠
京都外国語大学教授
京都大学名誉教授



西川長夫
立命館大学国際関係学部教授



ヒュー・コータツツイ
元駐日英国大使



持田鋼一郎
旅行作家
「米欧回覧の会」会員



シルヴァーナ・デ・マイヨ
レッツェ大学講師

ではないか、などと、よしなきことを思う。

『いろいろな味を楽しむ』

川勝さんの「力から美へ、庭園国家論」も示唆にとんだお話だったし、会員の坂内さんの、回覧の旅と旅人たちの成長、そしてロシアでは久米はくたびれていたらしいという話も面

11月24日
セミナー
第2日

多彩な視点から熱心な討論

半澤健市

第一日に比べるとやや聴衆は減って七十名台であった。でも、隣の一橋記念講堂でマラソン上映会を開催していたという条件のもとではよく集まったといえる。発言者は九名であった。

午前は『米欧回覧実記』を忠実に読む視点を中心にした発表である。プリンストン大のマーティン・コルカット教授は実記の米国編英訳者の苦心談から入り長年の研究成果を語った。最近、米国の日本史研究(たとえば『敗北を抱きしめて』『歴史としての戦後日本』)が注目を浴びているが、コルカット氏の発表を聴いて岩倉研究でも日本の研究者がうかつかできない時代になったと思う。

大妻女子大の銭国紅氏は日中比較の観点を交えて中国の

白かった。旅行作家持田さんの話もいかにもそういう目によるものという独特の味があった。また、西川さんのお話のように、あとから反芻して見ると、さらにたいへん濃い味を楽しめるお話もいくつもあった。そんなバラエティに富み豊かな味を楽しんだセミナー第一日であった。

地誌と中国人の見た岩倉使節団について発表した。

明星大学の古田島洋介氏は、実記の漢字の読み方というミクロな切り口から実記解説の一つの方法論を提示した。易きにつきやすい読者には厳しいが考えさせる内容だった。

昼食後はコーヒーブレークをはさんで六人の発表がおこなわれた。國學院大学の水谷三公氏は使節団の土地制度や政治の統治形態への関心についての発言で青木周蔵のユンカー論も話題になった。聖心女子大の山崎渾子氏は岩倉使節団の宗教認識、とくにキリスト教への関心の変化について整理された報告をおこなった。ルーヴァン・カトリック大のヴァンデ・ワラ氏は岩倉らが見た小国への冷静な目配りがある意味を問う報告であった。国

際日本文化研究センターの園田英弘氏は「地球が丸くなる」という切り口で、当時の交通・通信手段の発達によるグローバルゼーションを地図を資料にして話をした。北海道大学名誉教授で久米美術館の参与でもある高田誠二氏は技術史家の立場から近代日本の技術導入と岩倉使節団の関係をOH Pを駆使してわかりやすく解説した。次に当会の泉三郎氏が立ち岩倉使節団派遣から百三十年の日本を総括し、危機的な状況にある日本をどう打開するかとの問題提起を行なった。そして岩倉使節団の再認識、再検討で閉塞脱出のカギにしたといふ訴えた。最後に司会団の水沢周氏が二日間の総括をおこなった。

なお各セッションのあと三十分は「補足と討議」にあてられ発言者間の活発な質疑応答がおこなわれた。補足でコルカット氏が、市場としての日本、投融資先としての日本に期待をもった米国企業家による使節団への関心を実証的に語ったのが印象的だった。

発表者、討論者とも内容とプレゼンテーションに工夫を凝らした。聴衆も最後まで熱心だった。こう書くときつい印象だが会場にはリラックスした気分もあり参加者間のやりとりではしばしば笑い声が起こった。

司会者団

セミナー第2日発表者



水沢周
「米欧回覧の会」幹事



山崎渾子
聖心女子大学教授



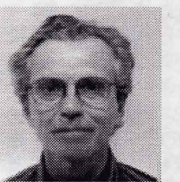
水谷三公
國學院教授
東京都立大学名誉教授



古田島洋介
明星大学日本文化学部
助教授



銭国紅
大妻女子大学助教授



マーチン・
コルカット
プリンストン大学教
授



半澤健市
「米欧回覧の会」幹事



泉三郎
「米欧回覧の会」代表



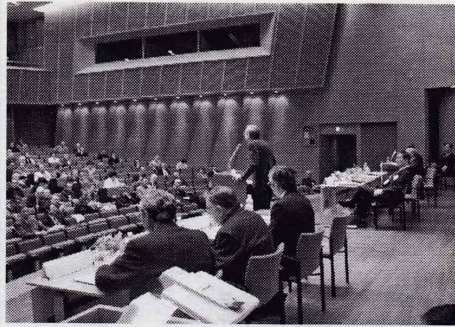
高田誠二
北海道大学名誉教授



園田英弘
国際日本文化研究セン
ター教授



ウィリー・
ヴァンデ・ワラ
ルーヴァン・カト
リック大学教授



11月25日(日)
公開
フォーラム

その今日的意義について

小林養丈

◆福澤諭吉、トクビル、ディケンズ

最終日に、一橋記念講堂で約三百名の参加者を得て、八名のパネリストによる公開フォーラムが開催された。テーマは「岩倉使節団と『米欧回覧実記』から、いま何を学ぶべきか」で、いわば四日間の総まとめに当たるものである。海外の方の素晴らしい日本語のお陰で、ジョークにもすぐ反応があり、やり取りが活発になって、会場の空気が一つに溶け合った。そして百三十年前の使節団の言葉の苦労に改めて思いを馳せ、もし彼らがこの会議に参加していたらどんな顔をするだろうという感慨がよぎった。

はじめに司会の泉氏から主旨説明と前日までの報告が行われた。次に基調講演として、芳賀徹教授から福澤諭吉と久米邦武の二人が「西洋文明をどう捉えたか」というテーマで話があった。生い立ちの異なる二人がそれぞれ、激動の時期に西洋文明に立ち向かい、その取り入れの立役者を務め、やがて福澤は西洋学者になり、久米は歴史学者になるという経緯を挿話を交えて興味深く紹介された。二人は西洋の近代文明を支えている精神を見抜き、福澤はそれを「人民独立の気力」とし「文明の政治」の必要性を説いた。一方、久米は「共和国の精神」に共鳴し、学問は「実証窮理」であるべきと説いた。基調講演その二として、コルカット教授から「アメリカの民主主義をどう見たか」というテーマで、久米と同時代に訪米したトクビル、ディケンズを取り上げ、久米と対比した。久米に比べ、トクビルは政治社会の分析については優れていたとし、ディケンズの社会と人間についての批判は鋭かった。久米は短期間で、語学上のハンディ

もあつたにも拘わらず、幅広い観察眼でアメリカの全体像を掴み、社会の実体についてはより深く把握していると述べた。そのあと、ブラウン教授から「アメリカにおける木戸孝允」と題して、木戸が一般教育の普及に功績があつたことを高く評価し、一面では美的センスがあり、またひょうきんでロマンチックなところがあつたという彼の人間面の紹介がされて面白かった。続いてパンツァー教授からは「夢から現実へ『米欧回覧実記』独訳にまつわる個人的なこと」と題して、ユーモア交じりで独訳の苦労とエピソードを紹介された。巧まらずして東西文明遭遇の一面を見る思いであつた。

◆いま、何を学ぶべきか

昼食のあと、「いま何を学ぶべきか」についての発言が四氏からあつた。まず、岩倉具忠教授は、長年のイタリア研究をベースに文化交流のあり方、歴史に共通性を見る態度の必要性を訴えられた。川勝平太教授は、西太平洋地域には引き付けられる文明、美の文明を作り出す潜在力があり、力の文明を包摂できると指摘された。サー・コータツツイ氏は岩倉使節団の観察結果は、かなり客観性のある見方であると判定し、使節団の結論とその後政府の施策について厳しい評価を加えた。最後に藤井宏昭氏からは、改革は

時代に合わなくなつたことからその必要が生じて来るので、今日の日本は使節団の原点の精神に立ち返って改革を実行することが必要であると提唱され、文化の多様性については寛容で、相手の優れたことを学ぶ態度が大切だと指摘された。なお、司会の紹介で挨拶された邦武の四代目の久米邦貞氏も英訳、独訳本が日本の近代化のやり方を広く海外に紹介出来るものとして期待を寄せられた。海外のパネリストからは、明治の日本人の素晴らしさを改めて日本語で称賛されると何となく面映ゆい思いがした。会場からの質問は、水沢氏がまとめて代表質問する形を取つた。旅行中の日常生活や費用負担に関することから、福澤は「実記」を読んだのだろうか。など質問は多岐に及び、興味深い回答に会場は沸いた。時間の関係から、質問全てを取り上げられなかったのは残念であつた。

◆まとめ

最後に「いま何を学ぶべきか」という観点で、講演や討論をまとめてみると次のようになる。第一に国家の指導者の持つべき態度である。指導者は高い理想に基づく使命感が必要であり、改革に対する大胆さ、勇猛さを持つべきである。政治家はステーツマンの自覚が必要

である。

第二に岩倉使節団の持つていた学習態度を学ぶべきである。何といっても、go and seeの実証的態度の大切さを教えてくれる。「日記」でなく「実記」であることの意味を考えよう、それも駆け足でなく、時間をかけて学んで来ることが大切である。異文化について自分の立場を失わないで、実際を寛大に見る態度、学ぶことの素晴らしさを知り、経験を通して成長する謙虚さ、知的精神力の高さなど、使節団の教えてくれるところは少なくない。第三は文化交流について、日本特殊論は止めにし、異文化に対し類似性、共通性を見ることの大切さが強調された。日本文化の紹介でなく、相手国文化を受け入れる姿勢の交流が必要である。使節団は自己の文化に対する誇りと自信を持ち、僻んだりしていない。また外国人



藤井宏昭
国際交流基金理事長



S・ブラウン
ミシガン大学客員教授
オクラホマ大学名誉教授